「山古志　復興新ビジョン研究会」

第１回地域基盤再生分科会　議事概要

1.日　時　**平成１７年1月２４日（月）１３：３０～１５：３０**

2.場　所　**新潟ワシントンホテル　４F 平安**

3.議事概要

（１）分科会座長挨拶（省略）

・社団法人　北陸建設弘済会理事長　和田　惇

（２）出席者紹介と配布資料の確認（省略）

（３）これまでの経過報告

①第１回全体会議

・事務局より説明（資料-3）

②第１回円卓会議

・事務局より説明（資料-4）

・質疑応答

（４）復興新ビジョンにおける分科会方針の検討

・新潟中越地震の被害と復旧状況について、北陸地方整備局中越地震復旧対策室長坂上氏より説明

（坂上室長）

・芋川については 5 箇所で河道閉塞が起こり、特に危険が大きいところは寺野地区と東竹沢地区の 2 箇所である。11 月 6 日に県から直轄が引き継ぎ、12 月 27 日までに融雪期の出水に耐える仮排水路を設けている。今現在は、通常の出水期に耐えうる護岸を補強しており、1 月までに完成させる見通しである。恒久対策では、今日ご出席の丸井先生に委員長になって頂いている芋川河道閉塞検討委員会で検討している。

・国道 291 号については、11 月 6 日付けで直轄が引き継ぎ、法的な手続きの後 11 月 11 日から本格的工事に着手した。小千谷市側の竹沢トンネルから小松倉集落の間約 10km を直轄で行う。東山トンネルから役場のある竹沢までは少し手を加え、崩落箇所を除去して 11 月中旬には工事用車両や緊急車両が通れるように復旧した。竹沢から梶金集落の約 1km 間は、道路全体が落ちて元の状態に戻せない状態であった。恒久復旧については、「国道 291 号災害復旧技術検討委員会」においてまとめているところである。12 月 4 日までに 2 回開催し、芋川の河道閉塞区間を除き基本的に原形復旧で、東山トンネルから山古志村役場付近までを

現道で復旧する方針である。

・竹沢～芋川河道閉塞箇所までは 12 月中旬までに応急的な道路を付けた。これは、今年の春の雪解けを待ってすぐに本格復旧できるように段取りしたものである。小松倉集落から芋川の河道閉塞区間は集落が無いので河道工事用の車両が通れるよう工事用道路として使えるようにした。来年度の、本復旧に向けて道路、河川の工事が始まると雪解けから 2 ヶ月程度で 10ｔダンプが通れる程度の道を確保しなければならない。関係機関で道路の調整会議を開催し、復旧スケジュールをネットワークで検討する予定である。全体のインフラ復旧について、1 月 21 日に第１回のインフラ復旧調整会議を開催し各復旧事業の情報の共有を図ることにしている。

（丸井委員）

道路復旧計画について、国道 291 号は重要で最優先で行うと理解しているが、集落の中で山古志村の他の地区を結んでいた道路は当面は無理であると考えてよいか。

（坂上室長）

基本的に同じレベルで考えている。国道 291 号や長岡を結ぶ幹線道路など幹線は 1 日でも早く復旧したいと考えている。私共が対象とする道路は国道、県道、村道の 1 級 2 級までを全体のネットワークの中で考えて検討したい。

（和田座長）

丸井先生の指摘は重要であり、ある程度の道路ネットワークさえあれば住民が集団移転した先から田んぼなど自分の仕事場へ軽トラックで行く事ができる。

（坂上室長）

工事用道路はインフラ復旧のためはもちろんであるが、集落の方が宅地に帰って作業するための利用も考えている。

（丸井委員）

今後、仮に（被災前に戻す復旧型と適地への集落移転を合わせた）ハイブリット型の復旧を目指すとしても集落同士のコミュニケーションネットワークを結ばないとうまく進行しないだろうと思う。

（和田座長）

国道 291 号の復旧について、幅員はどうなるのか？

（坂上室長）

基本は原形復旧であるが、県と調整して小千谷側から竹沢までは、歩道を含め 11 から 11.5m の幅員とする。その先の芋川までは極力 2 車線の 8.5mを考えている。可能な限り幅員を取りたいと考えている。

（丸山委員）

それは道路構造令にある堆雪余裕幅は確保できないという意味か？

（坂上室長）

道路構造令に準拠した構造になる。

（和田座長）

カットした土砂をどこかに埋めて広場を造るなどの配慮は考えているか。

（坂上室長）

道路脇に広場を造り物産を販売できる等の仕組みづくりについては、村長や商工会等の方々にもお話を伺って、民間主導でその辺は検討頂き、私共はバックアップしていきたい。

（大川委員）

鯉の飼育などは冬場の管理が重要である。村民にとっては冬場の活動の必要性が高い、現在すげ替えた道路は雪対策が無い訳だが。

（坂上室長）

昨年は緊急措置であり、春先に道路縦断など緩くし来年冬には除雪しやすい道にしたいと考えている。

（大川委員）

当面は雪が落ちてくるなど、通れるがゆえの被害も想定されるのではないか。

（坂上室長）

そのあたりは、監視カメラの設置や、雪崩の観測をして行くことにしている。

①復興ビジョンにおける基本方針

・事務局より集落再建の考え方、検討する復興期間、検討の視点について説明（資料-5）

・意見交換

（松本委員）

現在の積雪下では被害実態が把握できないので、正確な事態は、融雪期まで待たないとつかめない。研究会は、時期を得たアドバイスを出さなくてはならないが、長期を見据えて、雪解け後に起こる状況も加味して議論しなくてはならない。

（丸井委員）

前回の全体会議の議論と、本日の基本的な考え方の説明から、ハイブリット型での復興がこの会の意見が集約される方向であろうが、この方向性を村が受け入れるかどうかが最大のポイントである。山古志村のような中山間地域で発生した震災では、背景となる文化の形成過程と歴史の長さが神戸の場合とは違うことなどを理解されるかが大きな前提条件である。

②分科会における大きな方針検討

・事務局よりロードマップ、各分科会における検討事項、地域基盤再生分科会における検討事項について説明（資料-６）

・検討

（松本委員）

山古志村では確かに全村一斉避難をしたが、帰る段階では個人の帰村への意欲を最大限尊重すべきではないか。今日の話は計画的に帰村させるような印象がある。一方で安全への課題はあるが各個人の力を活かすのが良いと感じている。

（丸山委員）

全国の中山間地域復興のモデルを目指すなら、住民の気持ちを尊重するのも重要であるが、実現可能な方法を提示すのも大事である。コミュニティーを育てられるようなコンパクトシティーを形成するイメージではないか。

（大川委員）

実際、村に帰ってみて、自分の棚田が無いとか、水が引いてこられないとか、水が溜まらないとか、トラブルは多いだろうと予想される。我々復興スケジュールを考えているが、多分田んぼなどは個人の責任で負担することになるだろう。こうした状況に直面して初めて村民の意思がはっきり決断されるのではないか。とにかくまる一年経過しないと判断できない部分があるような気がしている。

（丸井委員）

住宅の再建、コミュニティーの再建をベースに基盤整備の議論をしているが、実は棚田の復旧は大事で、その復旧の見込みの差は場所ごとそれぞれ有り、復旧の優先順位をつけざるを得ない。早くできる所、時間の要す所、場合によっては放棄せざるを得ない所があるだろう。その辺の正確な判断、評価は雪解け後でないとできない。

（松本委員）

その判断をするためにも、住人が帰村して、自ら確認しないといけない。行政が調査して予算をはじいてでは、多くの時間を費やすことになる。

（５）.今後のスケジュールについて

・事務局より、今後のスケジュールについて説明（資料-７）

（松本委員）

電力、上水、下水はどのような状況か。

（坂上室長）

上水道など様々な災害復旧の申請は、雪解け後になる。当然道路の復旧にあわせて工事していく。

・他地域における災害事例について（事務局より参考資料－２説明）

閉会

（文責：事務局山口）